

書名：信仰の現場

～すつとこどっこいにヨロシク～

著者：ナンシー関

出版社：角川書店

出版年月：1997年6月

総ページ数：210ページ

ISBN：4041986036



推薦者

米延仁志

鳴門教育大学大学院教授

生活・健康系コース

(技術・工業・情報)

「何かを盲目的に信じている人にはスキがある。」(同書 11 頁)

あまり小難しい本を推薦しても読んでももらえないと残念なので、ちょっと古いという難はあるが、やわらかいものを紹介する。著者の職業は消しゴム版画家という一風変わったもの。作った版画を挿絵にしたコラムでテレビや社会を批評していた(2002年に39歳で急逝)。

内容は、いろんな「現場」に著者が出向き、そのときの体験を報告するというもので、ちょっとしたフィールドワークの成果報告書のようなものである。矢沢永吉のライブや宝くじの抽選会など広く雑多な世の中の「現場」が対象になっていて、何かに夢中になっている人の集まりに著者が参加しつつ、その人たちの様子や現場の雰囲気を観察している。

興味深いのは著者の視線である。なんだかヘンな人たちを揶揄したり蔑んだような態度で「現場」に臨んでいるのでは無く、冷静にものごとを観察し、読む人が共感を持てるような表現で文章に一定の公共性や公平性が保たれている。

さらに興味深いのは、その「現場」に関わることで、冷静さを保っているはずの著者がその雰囲気に乗せられてしまったり、世間一般的には「アヤシイ」と思われそうな人たちの振る舞いが、実は自分の生活でも別のかたちで無意識に行われていることを発見してしまったりしていることである。中立を装いつつ、その「場」を傍観していても、何か自分とのかかわりを見つけようとしてしまっただけで心が右往左往したり、凶らずも対象にコミットしてしまう。情熱的にものごとにかかわることはやはり大事なことはある。一方で、この著者のような視点も大事だと思う。

これを読んでいる本学の学生や院生のみなさんは、教育実習というかたちで学校の「現場」に参加する(した)だろう。そのうち教員採用試験で面接やミニ授業をやったりするだろう。こういう「現場」はとりあえず情熱的に、積極的にかかわることが求められると思う。けれどもどこかで自分や周囲のことをじっくりと考える時間をとって、自分の経験を他のひとにとっても価値のある情報に変換できるような努力をしてください。現実的なはなし、大学も含めて「学校現場」の昨今の問題の多くは、そういう時間の無さが原因じゃないかと思う。ここまで書いておいて思い出したけど、「時間どろぼう」が登場するミヒャエル・エンデの『モモ』もあわせてお勧めします。

